

会員通信

北海道虹鱒養殖 発祥之地の碑

野村哲一

北海道区水産研究所千歳事業所(北海道千歳市蘭越)の構内には、一般の来訪者に開放されているさけ・ます増殖に関する展示スペースや体験スペースがあり、その公開部分近くに、高さ約1m、幅約50cmの小型の石碑があります。碑が小型であるためか、余り来訪者の目を引かずひっそりと立っている感じの碑です。

碑の表には、「北海道虹鱒養殖発祥之地」、裏面には、昭和四一年九月十六日 北海道虹鱒協会建立と記されていますが、それ以外の碑文はなく、碑文からは建立の趣旨や経緯も分かりません。

北海道立水産孵化場(現北海道内水面さけます研究所)や水産庁北海道さけ・ますふ化場(さけます資源管理センター、現北海道区水産研究所)の元職員の方々にこの碑のことをお聞きしたところ、元北海道立水産孵化場長の伊藤繁さんが、北海道内水面漁業連合会の会誌「内水連」9号に寄稿された記事を紹介していただきました。

それによると、この碑は、大正6年3月に北海道に初めてニジマス卵が移殖されたことを記念し、

移殖から50周年にあたる昭和41年に、碑に刻まれている協会が寄付等を集め建立したもので、石材はニジマス養魚場の池底にあった自然石を使用したとのことでした。

明治10年にアメリカ合衆国からわが国に移殖されたニジマスが、大正に入り多くの県に移殖されるようになり、約50年を経過して津軽海峡を越え、北海道の地に到着し、さらに50年後に「北海道虹鱒発祥之地」を記録した碑が建てられたこととなります。

同記事の写真では、碑の横に白い説明の掲示があるのが確認できますが、現在は碑だけが立っているため、発祥の地となった経過等は訪問者には分りにくいようです。



碑の前面

碑の背面

大正6年3月のニジマス卵の当地への移殖については、農林省水産局1927年発行の「水産増殖調査書(特別)」に記述があり、当時の皇室林野管理局日光出張所養魚場(現在の増養殖研究所日光支所)から、この碑の存在する当時の名称で北海道水産試験場千歳支場に発眼卵で移殖されたとされています。前出の伊藤さんの記事にも記述されていますが、明治26年と大正2年にも米国から直接ニジマス卵を北海道へ輸入する試みがなされていますが、全数が死亡する失敗に終わっているようです。大正6年の移殖時には、すでに東北本線は上野―青森間全線が開通しており、青函連絡船で海峡を渡り、再度、函館から千歳までは鉄道輸送を利用したと推察されますが、千歳からは馬籠を用いて4日間を要して卵の移殖が完了したと記録されています。移殖の粒数は発眼卵27,000粒で、ミズゴケで湿度を保つとともに晒しなどにより衝撃の緩和をはかったものの、輸送中の孵化や孵化槽に収容後も死卵が多数出現するなど、苦労は多かったとされています。7,500尾が孵化したと記述されており、親魚となるまで飼育を継続して、移殖の2年後には採卵が行われ、その卵は全道各地に供給されています。昭和8年には150万粒の卵を30箇所、昭和23年度までには340万粒、180箇所に分譲したとの報告もあります。その後、生産は拡大し平成5年には北海道内で年間1,200トンのニジマスを生産するまで拡大していきました。

宅急便などの輸送システムが拡大し、低温での輸送が利用できる現在からは、及びもつかない苦労が昭和初期の卵の輸送にはあったものとは思いますが、関係者の熱意とサケ科魚類卵の輸送に適した様々の要素が、困難な状況の中でも移殖とニジマス養殖の拡大を成功させたものと思われる。

北海道に始めてニジマス卵を移殖した年には、北海道以外の本州各県にも移殖を行った記録があり、移殖先での成績やニジマス養殖の発展にどのように寄与したかについて興味のある点でもあります。会員の方々のお近くでも「各県のニジマス養殖の発祥の地」に関する情報があるのではと期待しております。

(参考資料)

農林省水産局. 1927. 外国産優良水族移殖成績. 水産増殖調査書(特別). 農林省水産局、東京. pp. 327-352.
規矩智生. 1950. 虹鱒の本道渡来とその飼育の将来性. 魚と卵, 第1巻5号, 18-20.
伊藤 繁 1997. 内水面増養殖史 淡水魚いしなみの碑. 内水連, 9号, 5-6.
